

聞法一遇

もんぼういちぐう

第15組 興隆寺
(書) 伊藤 秀 氏

教区教化テーマについて

【はじめに】

教区教化テーマは、教化本部（以下「本部」）発足以前から掲げられていました。本部発足以降は、教化本部長が交代の際、その都度、本部にてテーマの検討・策定が行われ、「教化本部テーマ」として発表。その後、教化委員会を経て「教区教化テーマ」とされてきました。

このたび、第8期教化本部が発足し、任期1年目においてテーマの協議を重ねてまいりました。4月16日、教化本部テーマとして策定。6月25日、教区教化委員会の議決をいただき、新たな教区教化テーマとして決定させていただきました。ここに教区教化テーマのご報告をさせていただきます。

【テーマの願い】

「聞法一遇」は、「聞法」と「一遇」を組み合わせた造語です。辞書には「聞法…仏の教えを聴聞すること」、「一遇…一度あうこと・一回出あうこと」とあります。二つの語句を組み合わせることによって、単語の持つ辞書的意味とは質を異にし、各自の受け止めによって広く深い意味が芽生えていくような、仏法の「願い」と「課題」の言葉として発信させていただきます。

宗祖の流れをくむ宗門並びに北海道教区が、私たち一人ひとりに願ってきたことは、「どんな時であっても、念仏申し共に聞法する人になってほしい」ということであろうと思います。生活の出来事とそれに関わる私を、仏法聴聞する

中で教えられていく歩みが願われ続けてきたのです。

「聞法」は、「仏の教えを聴聞すること」です。それは、仏の智慧、つまり如来の目・耳・心によって、あらゆる事柄を、私が見・聞き・受けとめさせていただくことです。そして、聞法において明らかになるその内容を、念仏者の先人は「本願との出遇い・自己との出遇い」と表現してくださいました。先んじて仏道を歩まれた教区の先輩方からも、「聞法とは出遇いということである」ということを折にふれ教えられてきたことです。

また、三帰依文には「我、今、見聞し受持することを得たり」とあるように、「聞法」とは「今」という「ひとたび」の「出遇い」と表現されています。今の私をひとたびの聞法から教えられ、出遇い続けていく生活が、現在の世相において願われているのだと思います。このことを「聞法一遇」という言葉に込めました。各自に様々な読み方をしていただきたいと思っています。

先人の念仏者の教えから連想する「聞法一遇」の読み方をいくつか列記させていただきます。

・「聞法は一に遇うなり」
(内容) 聞法から真実を教えらる。

・「聞法は一つの場に遇うなり」

(内容) 聞法によって生活の現場が無明の私に目を覚ます場として転換されていく。

・「聞法は一人を生み出し、出遇いをひらく」

(内容) 聞法から私という一人の存在を発見し、私や他者の出遇いが問われる。

・「聞法は一たびの連続であり、深く出遇うことである」

(内容) 聞法は、ひとたびの繰り返しであり、積み重ねて我が力にしようとする私を破り続けていく。

これらの文言で言い表せないほど、これまでの「聞法」で一人ひとりが特別な「出遇い」を繰り返してきたことでしょう。「聞法一遇」というテーマが各自の聞法生活の中で、様々な発見・領き・問いの言葉となって変化し、連想されていくことを念じてやみません。以上のことから、今一度、一人ひとりが常に「聞法」を中心とし教えに帰る生活、「出遇い」を大切にする教区でありたいと願い、教区教化テーマを「聞法一遇」とさせていただきます。

【テーマ思索の背景】

宗祖 88 歳（1260 年）、関東

の御同行である乗信房へ宛てたお手紙には、聞法者としての親鸞聖人のお姿を深く感じさせていただけでなくともに、聞法とはいかなる事柄か、について明確に示されている以下の一文があります。

故法然聖人は、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、

（『真宗聖典』603頁）

宗祖は、29 歳〜35 歳の6年間、直接、法然上人から、浄土の教え、本願念仏の教えを聞き続けられました。その後、法難を境にお二人の再会はやわなかつたわけです。しかし、宗祖 88 歳の時にお書きになられたこの一文を通じて、師法然上人から賜った本願念仏の教えを、50 年以上、繰り返し繰り返しかえし、念仏申し聴聞し続けてこられた聞法者としての親鸞聖人のお姿を感じることが出来ます。

さらに、宗祖は、浄土の教えを聞信する人は、愚者としての人生を歩ませていただくという往生人のお姿を、法然上人から教えられたことを明確に述べられています。これらのことから、聞法とは、

積み重ねて我が力としていく事柄ではなく、ひとたび、唯一無二の時と場において「南無阿弥陀仏」と出遇い、我が身の愚かさ、無明

の自分に目を覚まされ続けていく愚者としての歩みであるということが教えられます。

また、このお手紙の冒頭は以下の一文から始まります。

なによりも、ごぞことし、老少男女おおくのひとびとのしにあって候うらんことこそ、あわれにそうらえ。ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてせうろううえは、おどろきおぼしめすべからずせうろう。

（『真宗聖典』603頁）

当時（1259・1260年）、全国的な大飢饉と伝染病により多数の死者が出たことを、宗祖は心の底から悼みつつ、目を背けたくなるような厳しい世相を縁として、積尊が説かれた「生死無常のことわり」という教言から目を開くことの大切さを、関東の御同行にお伝えになられています。

当時の世相と類似する現在において、生活の具体的出来事を縁として教えに立ち帰り、そこから学び続けていく姿勢と仏法聴聞の大切さを教えられます。

このお手紙を通じて感じさせていただいたことは、新型コロナウイルス感染症に端を発した現在の

世相にあっても、もしくは、それとは違うどのような世相であったとしても、私たち真宗門徒は、ひとたびの念仏、ひとたびの聞法から教えられ、出遇い続けていく生活が願われているということなのです。

【結び】

以上のことから、造語「聞法一遇」という言葉を生み出し、教区教化テーマとして発信させていただきましたことといたしました。今後も、様々な仏事を縁として、聞法を大切にす一人ひとりが生み出されていく教区教化活動に尽力してまいります。教区内の皆様には、ご指導、ご協力の程をよろしくお願い申し上げます。

教化本部長 寺澤三郎